



Auditoriumの様子



会場エントランスの様子

吾郷 由希夫

大阪大学 大学院薬学研究科 神経薬理学分野

研究課題、タイトル

Overactivation of the VPAC2 receptor during the early postnatal period causes prefrontal synaptic abnormalities and cognitive dysfunction in mice

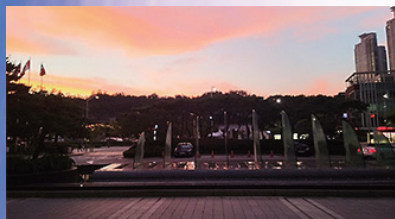
コメント

第46回日本神経精神薬理学会年会につづき、2016年7月3日～5日に韓国ソウル市（COEX）で開催されました第30回国際神経精神薬理学会（30th CINP World Congress of Neuropsychopharmacology: CINP2016）に参加致しました。今回、JSNP Excellent Presentation Award for CINP2016を授与下さいましたこと、この場を借りて厚くお礼申し上げます。

CINPへの参加は、2010年6月に香港で開催されましたCINP 2010以来、2回目の参加となりました。CINP2016の初日は第46回日本神経精神薬理学会年会の2日目と重複し、会場内を慌ただしく往来していましたが、非常に興味深い発表が多く、大変有意義な学会でありました。ポスター発表は合計750演題近くもあり、基礎から臨床まで幅広く、セッション中は活気に溢れていたことを思い出します。

CINPのシンポジウムでは同時時間帯に拝聴したいテーマが多くあり、悩ましかぎりでしたが、個人的にはうつ病のセッションを中心に聞き入っていた気が致します。モノアミン神経系との関連では、5-HT1A受容体と線維芽細胞増殖因子受容体やガラニン受容体とのヘテロ複合体のお話も興味深かったですが、ボルチオキセチンを中心としたうつ病での認知機能障害の治療に関する議論が心に残りました。またうつ病・双極性障害の神経認知機能障害について、客観的合理性に基づき感情とは独立するような“Cold Cognition”、予期・予想・期待に基づくような情動制御に関わる“Hot Cognition”、そして“実行機能（Executive function）”等の臨床での詳細な研究を拝聴し、普段自身がラットやマウスを用いた基礎研究を行っているときには、大きく“認知機能”としてひとくりにしながら限定的な行動テストバッテリーを検討している現状を振り返り、病態の解明や創薬を考えた時に、これらを基礎レベルでどう意義付けていくべきか、改めて考えさせられる機会になりました。その他にも、例えばケタミンの抗うつ作用に関する臨床および基礎のお話は、非常に大きなトピックであり、最新の成果を学ぶことができました。

私は薬学部の基礎研究者であり、普段臨床の現場をみることに、患者様と向き合うことはありませんが、このような学会への参加を通じて、臨床そして基礎における最新のテーマや課題に触れることは、大変有意義であることは勿論、自身の研究・教育に非常に大きなモチベーションになると感じます。今後も引き続き、神経精神薬理学分野の研究の発展に貢献できるよう精進して参りたいと思います。



会場外の夕暮れ

相良 英憲

松山大学薬学部医薬情報解析学研究室

研究課題、タイトル

Effect of pramipexole for learned helplessness behavior and cranial nerve activities

コメント

2016年7月にソウルで開催されました第30回国際神経精神薬理学会（30th CINP World Congress of Neuropsychopharmacology：CINP2016）に参加させていただきました。国際神経精神薬理学会への発表経験を通じて、今後の研究活動に大変刺激を受けました。

また、この度、日本神経精神薬理学会からJSNP Excellent Presentation Award for CINP 2016を受賞させて頂きましたこと、心より御礼申し上げます。微力ながら神経精神薬理の発展に貢献できるよう精進して参りますので、今後ともよろしくお願い致します。

井手 聡一郎

公益財団法人東京都医学総合研究所薬物依存プロジェクト

研究課題、タイトル

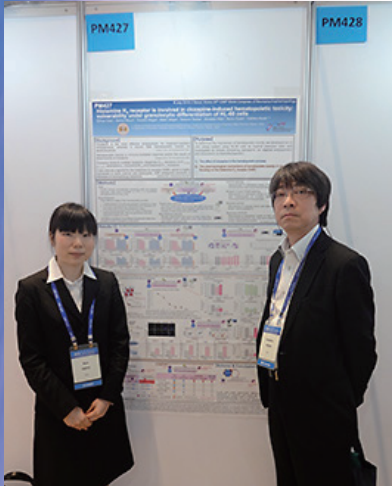
The abolished rewarding effect of methylphenidate in dopamine transporter knockout mice, a model for attention deficit/hyperactivity disorder

コメント

この度、韓国（ソウル）において開催された30th CINP (Collegium Internationale Neuro-Psychopharmacologicum) World Congress of Neuropsychopharmacology (会長 山脇 成人 先生) の学会大会に参加しました。私個人としては、CINPは初参加、ソウルへの来訪はAsCNP2011に続いて2度目となりました。大会とは関係の無い余談ですが、前回の訪韓の際に仁川空港を使ったため、今回も何も考えずにそちらを選んだのですが、現在だと金浦空港への便も増えて、ソウル市内へのアクセスがよい（場所にもよるのでしょうけど）ことを予約後に知り、ちょっと残念でした。また、ガーリックアレルギーという厄介な体質をもつ私は、あいにく殆どの韓国料理が食べられないため、街角のパン屋やコンビニエンスストアが至る所にあるソウル中心部は便利で、今回もお世話になりました。

さて本大会と、連続開催となりました直前のJSNPの期間中は、残念ながら雨が降りしきり、あいにくの天候でしたが、多くの方が会場を訪れ熱気のある大会であったと感じました。どのセッションにおいても非常に活発な議論が行われ、精神薬理学研究の最新の知見を得られ、非常に勉強になりました。特に、うつ病研究においては、ケタミンの有用性に関する発表が注目されていたように思いました。また、CINP Japan Nightに関しては、準備の段階よりお手伝いさせて頂き、当日も拙いながら司会進行を担当させて頂きました。慣れない地での開催でもあったため、運営側にも多々不手際もあり恐縮しきりではあったものの、皆様のおかげをもちまして盛況のうちに会を終了することができました。この場を借りて改めて御礼申し上げます。

今回、自分の発表には、基礎研究者だけではなく、国内外の研究者がポスターを訪れ、質問を頂きました。指摘された点はどれもとても参考になり、異なった観点から研究結果を考察する良い機会であったと思います。最後になりますが、日本神経精神薬理学会よりJSNP Excellent Presentation Award for CINP 2014を受賞いたしました。この場を借りまして、御礼申し上げます。今後の精神神経薬理に貢献できますよう研究を進めて参ります。



後藤 綾

名城大学大学院薬学研究科 病態解析学 I

研究課題、タイトル

Histamine H4 receptor is involved in clozapine-induced hematopoietic toxicity: vulnerability under granulocytic differentiation of HL-60 cells

コメント

2016年7月3～5日、韓国ソウル市の国際会議場（Convention & Exhibition; COEX）にて開催されました第30回国際神経精神薬理学会（30th CINP World Congress of Neuropsychopharmacology; CINP 2016）に参加いたしましたので、学会および現地の様子を報告いたします。

ソウルの7月初旬は日本と同様梅雨の時期にあたり、雨が降る中での開催となりましたが、あいにくの天候を吹き飛ばすかのような多数の参加者が集う活発な学会でした。国際神経精神薬理学会への参加は今回が初めてでしたが、神経精神薬理学の基礎から臨床まで、最新的话题を幅広く学ぶことができました。

30回目の記念大会である今大会の特徴としては、今までの歴史とともに今後の神経精神薬理学のさらなる発展に向けたテーマの講演が多数行われたことです。例えば、シンポジウムでは、統合失調症や双極性障害をはじめとし、心的外傷後ストレス障害（post traumatic stress disorder; PTSD）や自閉症スペクトラムなど、様々な神経精神疾患の病態・治療の標的分子について、動物や臨床サンプルを用いたゲノム・エピゲノム研究、プロテオミクス研究、および大規模コホート研究が報告されていました。このように、神経精神疾患におけるトランスレーショナルリサーチの発展を実感しました。兼ねてより憧れであった、統合失調症の薬理的分子病態と治療薬の機序解明に貢献されているHerbert Y. Meltzer先生にお会いできたことは大変刺激になりました。

私は、抗精神病薬クロザピンの副作用である血液毒性の発現機序に関して培養細胞を用いた研究について発表いたしました。発表時には多数の研究者から有益な質問や助言をいただきましたが、自身の英語力の未熟さを痛感し、今後さらに語学力に磨きを掛けたいと思いました。

今回、本演題にてCINP 2016と同時開催であった第46回日本神経精神薬理学会年会のJSNP Excellent Presentation Award for CINP 2016を受賞することができ、誠に光栄に存じます。この場をお借りしてご指導ご鞭撻を賜りました先生方、学会関係者に厚く御礼申し上げます。今後も日々精進し、神経精神疾患の病態解明や新規診断・治療法の確立に還元できる成果を目指して研究に邁進していく所存です。



内田 貴仁

慶應義塾大学医学部精神・神経科学教室

研究課題、タイトル

Concomitant Use of Benzodiazepine Hypnotics and Alcohol in Patients with Schizophrenia, Depression and Insomnia: A Preliminary Finding

コメント

2016年6月3日～5日に韓国ソウルで開催されました第30回国際神経精神薬理学会（30th CINP World Congress of Neuropsychopharmacology; CINP2016）に参加致しました。この度、JSNP Excellent Presentation Award for CINP 2016を授与下さいましたことを、この場を借りて御礼申し上げます。

学会場の雰囲気ですが、精神薬理の世界大会ということで、著名な先生方と場内の至る所でお話する機会があり、さらには、その先生方の最先端の研究や知見に関するご講演を拝聴でき、非常に刺激的な3日間でした。CINPへの参加は前回のバンクーバー大会に続いての2回目だったのですが、前回大会でポスター発表をされていた先生が、今回の私の発表時に来て下さいました。その先生も2年前のことを覚えて下さっており（2年前にお話したのはほんの短い時間であったにも関わらず）、私は感動を覚えるとともに、世界と少しずつ繋がっていている事を実感でき大変嬉しく思いました。私のポスター発表自体は、拙い英語のためにまだまだ満足いくディスカッションができませんでしたが、今後の糧としたいと思います。

韓国には初めて訪れましたが、学会場のCOEX周辺には屋台等はなく、日本と変わらぬ都会的な雰囲気に驚きを感じました。しかし、学会場をすこし離れると本場の韓国料理を堪能することができ、学会場を離れても充実した時間を過ごすことができました。

最後になりましたが、今回の受賞および演題作成について様々なご助言を賜りました諸先生方、学会関係者の皆様に、この場をお借りして御礼申し上げたいと思います。ありがとうございました。今後も少しずつ研究を続け、微力ながら精神薬理の発展に貢献できればと考えています。この度は誠にありがとうございました。

吉田 和生

慶應義塾大学医学部精神・神経科学教室

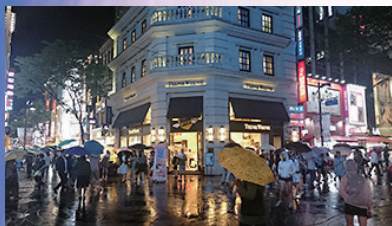
研究課題、タイトル

Improvement to antipsychotic treatment at week 2 predicts subsequent treatment response in behavioral and psychological symptoms with dementia: Analysis of the CATIE-AD data

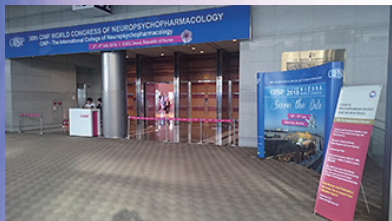
コメント

2016年6月3日から5日にかけてソウルにて開催されました第30回国際神経精神薬理学会(30th CINP World Congress of Neuropsychopharmacology; CINP2016)に参加いたしました。そして、CINP2016ではJSNP Excellent Presentation Award for CINP2016を受賞させていただき、誠に光栄に存じます。今回、米国国立精神衛生研究所主導の大規模研究データを二次解析し、認知症の行動・心理症状に対する抗精神病薬による治療において、2週時点の改善（早期改善）の有無がその後の治療反応を予測する因子になる、という結果を発表致しました。ソウルという地で、種々の韓国料理による刺激を脳に与えると同時に、今回の発表を通して多くの国際的に著名な先生方と議論を交わすことができ、私の脳はさらに活性化されました。本当に貴重な経験をさせて頂いたと思います。

最後に、Excellent Presentation Award for CINP2016の受賞に関しまして、ご指導頂きました先生方、学会関係者の皆様に、この場を借りてあらためて深謝申し上げます。これからより一層、研究活動に邁進していく所存でございます。今後とも御指導御鞭撻のほど何卒宜しくお願い申し上げます。



大雨に見舞われるソウル（明洞）市街。



大会会場（COEX MALL）内の様子。



JSNP2016の大会の懇親会の会場（COEX 1F 102+103）にて参加者の誘導を行う筆者



JSNP Excellent Presentation Award for CINP 2016の受賞者（筆者は不在）。

西澤 大輔

（公財）東京都医学総合研究所・依存性薬物プロジェクト

研究課題、タイトル

Genome-wide association study identifies candidate loci associated with postoperative fentanyl requirements after laparoscopic-assisted colectomy

コメント

この度、韓国のソウルにおいて開催された30th CINP (Collegium Internationale Neuro-Psychopharmacologicum) World Congress of Neuropsychopharmacology (会長 山脇成人先生、Jun Soo Kwon先生) の学会大会に参加しました。今回の大会は、私個人としては、2014年のバンクーバーでの大会に引き続き、三度目のCINPの大会参加となりました。前回の大会では、学会の初日の（Receptionを含む）Opening Ceremonyの直後（実際には途中の時間から）において、別会場にて、日本人参加者を中心とするCINP Japan Nightのパーティーが企画されていましたが、今回は、同会場において直前の日程で懇親会を含むJSNP2016の大会が開催されていたためか、CINPの大会期間中にJapan Nightは開催されず、JSNP Excellent Presentation Award for CINP 2016の授賞式はJSNP2016の大会の懇親会において行われました。私は前回の大会に引き続き、このような名誉ある賞を頂くことが出来まして、大変光栄に思います。そこで、雑駁になってしまいますが、大会自体についての感想、並びに授賞式を含めたJSNP2016の大会の懇親会の感想を述べさせていただきます。幾らかでも、本大会をあまりご存知でない方、また、本大会のような国際学会に関心のある方などの参考になれば幸いです。

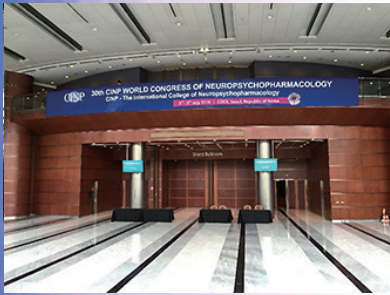
今回の大会はJSNP2016の大会と合わせて7月2～5日の期間に開催されましたが、今回の開催期間中とはとにかく天気が悪く、大雨が降っていた日もあり、ほとんど晴れ間が無かったように思います。私の日程としては前日の7月1日に入国して会場の視察などをしておりましたが、その日も大雨となっており、空港から会場までは電車が直通でしたので問題無かったのですが、会場からホテルへ向かう際のスーツケースを転がしながらの屋外の移動には、場所の土地勘が無いこともあり、些か苦労しました。日本からは小型の折り畳み傘を持参していましたが、そのような傘では雨粒を十分に防ぐことが難しい程の大雨でした。帰国前日の7月4日の夜には今回の学会出張におけるお土産の購入目的もあり明洞の街へ足を運んだのですが、その時も終始纏まった雨が降っており（図1）、屋台で食べ歩きをする人たちも傘がぶつかり合うなど大変そうな状況でした。後に知ったことですが、通常はこの時期は梅雨前線が日本列島上でも本州、特に関東地方の緯度の辺りに停滞することが多いものの、本年は少し北上しており、ソウルの辺りに停滞して、しかも活発化していたようです。（帰国後に知りましたが、日本のニュースで報じられるほどの大雨であったようです。）旅行にトラブルはつきもの、とは言われますが、学会参加のための旅行に関しても、何が起るかが分からないのは同じです（国際学会は旅程が長いこともあり何らかの不運なアクシデントに遭う確率は上がると思います）。国際学会は慣れていない方は、（本人が充分注意しても外因性のトラブルに遭

う可能性もありますが、) 余計に気をつけられると良いかと思えます。

さて、今回の大会が開催されました韓国は、私が訪れたのは二度目でしたが、街並みの様子は、看板などの記載がハングル文字となっていることを除けば、やはり比較的日本に似ているように思いました。会場はCOEX MALLというコンベンションセンターで(図2)、韓国仏教の最大宗派の伝統寺院とされる奉恩寺の近くでした。本大会においては、前回のような北米はなく日本の隣国の韓国での開催ということもあったのか、日本人の参加者は多数派であったようで、盛会であった直前のJSNP2016大会の流れをそのまま引き継いでいるようにも思われました。このことはやはり、Neuropsychopharmacologyの研究分野において、日本が枢軸の一翼として重要な役割を担っていると考えられるかもしれません。構成としては、シンポジウムや口演・ポスター発表などの他、Satellite Symposia、Plenary Lectures、Workshops、Presidential Symposium、等の様々なプログラムが多数組まれており、プログラムの内容としては、ほぼ前回大会と同様のものでした。ただ、今回は、前回と異なり4~5日間ではなくほぼ3日間程の日程でプログラムが組まれていた点、及びPoster Sessionsが夕方ではなく昼間の昼食時の時間帯に組まれていた点等が構成上の大きな相違点かと思えます。また、Indian Symposium、Asian Symposium、Taiwanese Symposiumのような、地域的な研究の背景などが内容に盛り込まれたシンポジウムが組まれていたことが印象的でした。研究内容としては、依然として幅広いジャンルをカバーしているので、Neuropsychopharmacologyの研究分野が専門の方もそうで無い方も、また、(私が述べるのもおこがましいですが、) ベテランの研究者や臨床医の方のみならず、研究歴の浅い大学院生などにとっても、十分に得られるもののある学会と言えるかと思えます。総括致しますと、本大会における精神医学や神経科学、薬理学などの研究領域の研究者や医師の講演、及び研究者や医師との交流は、最先端の研究成果や治療の理解を促進する上で大変有意義であるように思いますので、本大会のような国際学会に普段あまり参加されていない方は、積極的に参加されてみることをお勧めします。

JSNP Excellent Presentation Award for CINP 2016の授賞式が行われたJSNP2016の大会の懇親会は、会長が私と同所属のスタッフということもあり、準備の段階より少しお手伝いさせて頂いておりました。約1時間30分という限られた時間の中で、参加者どうしの歓談の時間以外に、各先生方の挨拶、各種の授賞式、及び次回大会告知、等の様々な時間がタイトに設定されており、段取り通りに進行するかどうか不安でしたが、(最終段階頃に計画されていた参加者の席替えの予定が変更されたものの、それ以外は、) 概ね順調に進行し、ほぼ予定の時刻通りに終了することとなりました。ただ、私自身は座席指定された様々な先生方を指定席に誘導したり(図3)、JSNP Excellent Presentation Award for CINP 2016の授賞式の際には受賞者が整然と整列できるように導く役割の係でしたので、バタバタとした状況の中、授賞式に臨むこととなりました。受賞者は記念撮影に臨む予定でしたが、私は係の役割として整列しつつある受賞者の列の人数を遠くから数えるなど様子を見ている間に、記念撮影の壇上に上がりそびれてしまい、写真に写らずに終わってしまいました(図4)。ただ、受賞者の人数はCINP2014の大会の時と比較してかなり増加していたようで、Neuropsychopharmacologyの研究分野における若手研究者の層が厚くなっているということなのか、あるいは単に今回の大会では隣国の韓国での開催ということもあり日本からの参加者が多かったためにそれに比例して受賞者が多かったということなのか、詳しくは分かりませんが、と

もあれ、懇親会自体は、最終的には前回大会と同様またはそれ以上に大盛会となったように思います。なお、本大会において受賞対象となりました私のポスター発表の内容は、主としてpharmacogenetics/pharmacogenomicsに関するもので、しかも網羅的SNPアレイを用いた解析でしたので、他の演題と比較して幾分珍しい内容であったかと思いますが、今回このような立派な賞を頂くことができましたので、受賞者の名に恥じないように、また、受賞を励みとして、今後もNeuropsychopharmacologyの研究の発展に貢献できるよう、精進して参りたいと思います。



大井 一高

金沢医科大学医学部精神神経科学

研究課題、タイトル

Structural Alterations of the Superior Temporal Gyrus in Schizophrenia: Detailed Subregional Differences

コメント

私はこの度、2016年7月3日から5日にかけて韓国ソウル・COEXにて開催されました第30回国際神経精神薬理学会(30th CINP World Congress of Neuropsychopharmacology; CINP2016)に参加し、JSNP Excellent Presentation Award for CINP 2016を受賞することができました。日々の研究成果がこのような賞の受賞に繋がり、大変嬉しく思っております。韓国ソウルを訪れたのは、2011年に開催されましたAsCNP 2nd Congress 2011に引き続き2回目でした。あいにくの雨でしたが、韓国焼肉など韓国料理を堪能して来ました。

今回の大会は、私は2012年のストックホルムでの大会に引き続き、二度目のCINP参加となりました。私は前回参加したストックホルム大会ではRafaelson Young Investigator's AwardおよびJSNP Excellent Presentation Award for CINP 2012を受賞させて頂きました。本大会においても名誉ある賞を頂くことが出来まして、大変光栄に思います。

本大会でも、精神神経薬理のトピックを基礎薬理学から臨床上的の問題点に至るまで幅広くおさえることができました。ワークショップやシンポジウムでは、基礎研究のみならず、臨床研究やトランスレーショナル研究も含め多岐に渡る内容となっており、特に最先端の研究成果の講演などからは得られるものが多く、学術的にも非常に意義深いものとなりました。

私は今回、統合失調症のMRI画像研究の演題を発表し上記の賞を頂きましたが、元々は統合失調症をはじめとした分子遺伝学を中心に研究しており、主にGeneticsやBiomarker関連のシンポジウムを中心に拝聴しました。Joel Gelemter博士らのシンポジウムでは、メタンフェタミン、アルコールおよび大麻などの薬物依存におけるゲノム研究の現状や、Patricio O'Donnell博士らのシンポジウムでは、統合失調症に関連する酸化ストレスと炎症性サイトカインについての新しい知見など、非常に多くの事を学ばせて頂きました。中でも統合失調症における抗炎症作用を標的にした治療が、統合失調症の脳形態学的異常や認知機能障害を改善させる可能性を示した演題では、統合失調症の新規治療として今後発展・確立していくことが期待されるものではないかと思いました。

このように本大会は精神医学や神経科学、薬理学などの研究領域において、最先端の研究成果や治療の理解を促進する上で大変有意義であり、今後も引き続き参加したいと思っております。

末筆となりましたが、今回のJSNP Excellent Presentation Award for CINP 2016の受賞にあたり、常日頃よりご指導ご鞭撻を賜りました皆様、および学会関係者の皆様に深く御礼申し上げます。この受賞を糧に、更に日々の研究に邁進していきたいと思っておりますので今後とも宜しく願い申し上げます。



仲西 萌絵

理化学研究所脳科学総合研究センター精神生物学研究チーム

研究課題、タイトル

A novel mutation associated autism in Neuroligin1



棚瀬 将太

名城大学薬学部薬品作用学研究室

研究課題、タイトル

Prenatal nicotine exposure impairs adolescent mouse hippocampal function



國澤 直史

大阪薬科大学薬品作用解析学

研究課題、タイトル

Pharmacological analysis of nicotine-induced tremor

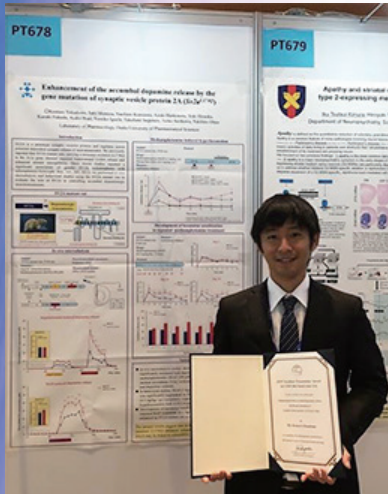
コメント

この度、韓国（ソウル）において開催された30th Collegium Internationale Neuro- Psychopharmacologicum (CINP) WORLD CONGRESS OF NEUROPSYCHOPHARMACOLOGYへ参加しました。

本学会には、神経精神疾患の研究、治療にあっている演者が世界中から参加しており、最新の基礎研究から薬物治療まで幅広い内容の演題を聞くことができました。中でも、うつ病に関連のあるシンポジウムに多くの参加者が集まっていた印象を受けました。現在、うつ病に対する薬物治療の有効性は60%前後と満足のものではなく、また、多くの抗うつ薬の効果発現には2～6週間かかることが知られております。そのため、うつ病に対する新たな治療戦略への注目が高まっているのではないかと考えます。私は今回、国際学会に初めて参加致しましたが、本大会を通して、国際学会に参加することは、最新の研究に関する知識を得るだけでなく、どの研究領域が今世界で注目されているかを直に確認できる貴重な機会でもあったと感じました。

自身のポスター発表では、拙い英語ながらも多数の先生方とディスカッションさせて頂くことができました。また、頂いた質問や提案、指摘された点などは、とても参考になり、とても大きな収穫となりました。今回の経験を日頃の研究活動に活かしたいと思います。

今回、日本神経精神薬理学会よりJSNP Excellent Presentation Award for CINPを授与されましたことを大変光栄に思います。日頃よりご指導ご鞭撻を賜りました皆様、及び学会関係者の皆様に深く御礼申し上げます。



ポスターの横にて

徳留 健太郎

大阪薬科大学薬品作用解析学研究室

研究課題、タイトル

Enhancement of the accumbal dopamine release by the gene mutation of synaptic vesicle protein 2A (Sv2aL174Q)

コメント

2016年7月3日（日）から同年7月5日（火）までの期間、韓国のソウル市にあるCOEXで開催された第30回国際神経精神薬理学会(Conference of the International College of Neuropsychopharmacology(CINP))に参加し、自身の研究成果について発表をさせていただきました。また、2016年CINPにおいて、私はJSNP Excellent Presentation Award for CINP 2016を受賞することができ、ご指導いただいた先生方、並びに、選出していただいた学会関係者の皆様に対して、厚く御礼申し上げます。参加させていただいた学会の様子についてご報告させていただきます。

CINPは7月3日のみJSNPと同じ会場にて発表が行われておりました。学会全体としては、JSNPよりもスケジュールがゆったりしており、落ち着いて講演を拝聴することができました。韓国での開催ということもあり、日本人や韓国人、中国人などのアジア系の参加者が多かったのも、今回の学会の特徴であったように思えます。

Thomas Klausberger 先生 (Austria) の“Contribution of distinct types of GABAergic interneuron to working memory and decision making”という演題では、内側前頭前皮質における錐体細胞およびGABA介在神経の相互作用と、意思決定時のそれぞれの神経細胞の興奮パターンとそれぞれの相互作用様式について報告がなされていました。この発表を通じて、私は、統合失調症および認知機能障害におけるGABA神経系による調節の重要性を再確認し、現在私が取り組んでいる研究に応用したいと考えております。

私は、シナプス小胞蛋白SV2Aと側坐核ドパミン遊離に対する影響について、本学会でポスター発表をさせていただきました。私にとって、今回の発表が2度目の海外で開催される国際学会であったため、私は、積極的に英語で討論しようと、前回以上に多くの人に話しかけることを試み、この経験を通じて、私は多くのことを学ぶことができました。加えて、私のポスターに興味を持ってくださる日本人の参加者は多く、私は自分の研究活動にやりがいを感じることができました。

最後に、本学会での参加および発表を通じて、私は、自分の仕事であるシナプス小胞蛋白SV2Aと神経精神疾患の関連について、本学会で得た知識を応用し、研究に幅を持たすことができるよう、日々研究活動に取り組んでいきたいと考えております。



COEX convention center in Seoul, South Korea



Main auditorium used for CINP symposiums

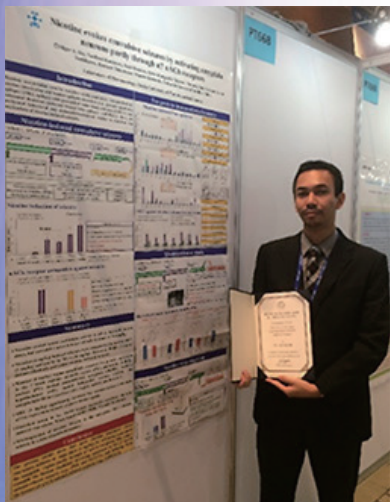


Photo with the presented poster in CINP and holding the received award

アルベス 伊波 イーゴル 大阪薬科大学薬品作用解析学

研究課題、タイトル

Nicotine evokes convulsive seizures by activating amygdala neurons partly through $\alpha 7$ nACh receptors

コメント

In the year of 2016, the 30th “The International College of Neuropsychopharmacology (CINP) World Congress of Neuropsychopharmacology” took place at the COEX convention center, in Seoul Korea (Fig. 1), a place with a nice and comfortable atmosphere (Fig. 2). At this meeting, differently from scientific meetings in Japan and Brazil, which I previously attended, presentations were in a lighter atmosphere than in Japan including some jokes or funny comments by the presenters, however, not as lighter as in Brazil where presenters sometimes interact directly with the audience. This lighter atmosphere has showed to be prompt for the participation of the students in the audience, students whom seemed lost their fear to ask very basic things, for example, many students made many questions and participate in discussion, even I made some questions and enjoyed discussions.

Regarding the content of the presentations, ketamine in different psychopathy treatments were discussed, including its side-effects (e.g., abusive use due hallucinogenic effects) and presenting new forms of improving classic therapy (e.g., blocking of muscarinic acetylcholine receptor 2 and 3 improved ketamine-effects on depression). Also, they presented clinical research data on benzoate chronic administration for Alzheimer disease and the effects of scopolamine in the affective illness. At the end, the presenter stated that tailored medicine still an important field, since they verified in patients responding or not to the benzoate or scopolamine treatments presented different pattern of genetic biomarkers.

For the last day, data on the main role of serotonin in the waiting for delayed reward process by dorsal striatum-Raphe nuclei pathway, then the use of galanin to improve depressing related effects and some topics on suicide, where they stressed difference in eastern high suicidal rate and westerns high schizophrenia and bipolar disorders showing that environmental effects should not be forgot when studying this subject. Finishing, a relation of suicide and violent people by showing evidences where violent people had a 3 fold higher attempt/success rate and that not only men are responsible to have 4 time fold higher suicidal (success) than women due their impulsivity. Interestingly, it also included

other factors like socio-cultural stress, not being priority on government health programs, and not being so well-treated by psychiatrics as women as causation of this great difference.

In the poster section, I presented poster regarding the investigation of nicotine-induced seizures, from evoking convulsive seizures until finding the causative site of the later (Fig. 3). A presentation made on free-discussion style, most received questions were about the procedure of guide cannula placement in the amygdala region. Since microinjection experiment is hard and delicate process, it is a common question, however, unexpectedly at this time I was asked which part of work I was directly and indirectly involved and how those experiments were carried out, maybe because it was a great amount of data, but it was easy to explain since our laboratory work in groups of 6-8 students with responsibilities gave due how long they are used to perform experiments it. This work was granted with an award for excellent presentation at open ceremony dinner which presented a very classy and tasteful dinner.

Concluding this report, I may stress that the opportunity to present our work to experts of different parts of the world is a priceless opportunity to divulge and have our work evaluated by different people with different line of thoughts. International scientific meetings lead wide broad of new ideas and research network that are essential to new projects and even collaborations. Of course, any scientific meeting gave the opportunity to learn the new trends on scientific affairs and helps to direct the focus on research subjects, showing which scientific fields requires more attention and investigation, and those who does not need priority.



CINPのポスターと賞状

向井 崇浩

大阪薬科大学大学院 薬品作用解析学研究室

研究課題、タイトル

Modulation by cerebellar D3 receptors of dyskinesia induction in rats.

コメント

平成28年7月3日から7月5日の3日間、韓国ソウル市の国際会議場（COEX）において開催された第30回国際神経精神薬理学会（Collegium Internationale Neuro-Psychopharmacologicum: CINP）世界大会に参加し、自身の研究成果について発表させて頂きましたので、報告させて頂きます。

今回、CINPにおいてポスター発表を行うことができ、非常に貴重な体験をさせていただきました。私にとって初めての渡航であり、全てが新鮮な体験でした。今までの国内学会でも英語のポスターで発表することや、英語のセッションを聞くことはありましたが、実際に海外に出て英語でコミュニケーションをとることは初めてで、その難しさを痛感したものの、とてもよい勉強になりました。今後、研究者として生きていくためには、今すぐにでも日常英会話くらいはマスターしたいと考えています。

私は、7月5日にCINPにおいて“Modulation by cerebellar D3 receptors of dyskinesia induction in rats.”という演題でポスター発表をさせていただきました。

CINPのポスター発表はフリーディスカッション形式でした。発表時間はありませんでしたが、11:30～13:00のランチの時間と同時にポスターセッションがありました。普段の生活の中で、英語を話す機会は余りありませんので、英語で質問されたときの対策として、ポスター全体の説明や想定質問を英語で答えられるよう準備をして行きました。私の拙い英語でも何人かの方から質問をしていただくことができ、様々な視点からのコメントもいただき、勉強になりました。しかし、もっと積極的に自分から話しかけコミュニケーションを取れば良かったと、今思えば少し後悔もしています。次に海外での学会発表の際には、話す機会をさらに作れるよう努力したいと思います。また、CINPのポスターセッションの中でも、多くの日本の方から質問やコメントをいただけたことは非常に有り難かったです。学会を通じて様々な方と交流を広げていきたいと思いました。

そして、“JSNP Excellent Presentation Award for CINP 2016 Seoul”という賞をいただくことができ、非常に光栄に思っております。この場を借りて深く御礼申し上げます。この賞を励みに今後とも一層、研究活動に精を出していきたいです。

最後に、このような機会を与えて下さった学会関係者の皆様に心からの感謝を表し、報告とさせていただきます。



吉田君との再会 (筆者は右)



学会会場を奉恩寺から望む (中央が会場)

山脇 洋輔

広島大学 歯学部 細胞分子薬理学

研究課題、タイトル

Phospholipase C-related catalytically inactive protein is involved in the neuroinflammation-induced anorexia

コメント

2014年7月3日から5日にかけて、韓国ソウルにて開催されました第30回国際神経精神薬理学会(29th CINP World Congress of Neuropsychopharmacology; CINP2016)に参加いたしました。また、今回JSNP Excellent Presentation Awardを受賞させていただきましたことを、この場を借りて御礼申し上げます。本学会には2010年に初めて参加して以来、可能な限り参加しております。今回は、隣国である韓国での開催ということで広島空港からの直通便で簡便かつ短時間に渡航可能できたので移動の疲れも、時差もなくありがたい環境でした。到着後、仁川空港の大きさに恐れおののきながらなんとかバスに乗り、会場まで向かいました。欧米と違い周囲のほとんどがアジア人であることは何となく安心感を与えてくれたのもつかの間、標識に英語がなくハングルであるため現在地がわからないという事態を何とか乗り越え、ようやく会場につきました。

本学会の特徴は何といても臨床領域と基礎領域が交差する国際学会であることと思います。薬剤師国家資格を持つてはいるものの臨床現場をほとんど知らない私のような基礎研究出身者からすれば、臨床研究を間近で見聞きでき、ヒトを対象とした研究の大変さ、重要性を垣間見る最高の場所となります。私は、炎症が引き起こす中枢機能障害をグリア細胞を標的として研究を行っておりますが、関連する発表が多くあり(毎度のことながら苦手の英語で)質問などを交えて知識を深めることができました。また、かつてお世話になっていた研究室のボスや同僚たちとも顔を合わせ、近況などを報告しあえたことも専門分野が似通っているからこそだと思い、また参加しよう、そのためにもがんばろうという気持ちを一層高めてくれました。

加えて、全くの偶然で、徳島大学での学生時代、同じアパートに住んでいた同級生である吉田和生先生とJapan Nightにて10年ぶりの再会を果たすことができ、二人で再開を祝いました。「いつかまた」とアパート『ロックバレー』で別れた吉田君とCINPで再開するとは夢にも思わず、また彼が本学会で多くの賞を受賞していたことを知り、喜びとともに自らも奮起せねばならぬと再度認識をした次第です。

最後になりましたが、JSNP Excellent Presentation Awardを受賞させていただきましたことを誠に光栄に思います。現在の私は、決して私個人のみの方ではなく、多くの師と友人そして、両親の協力のもとにあることに感謝し、これからも日々精進して参りたいと思いますので今後ともよろしくお願い致します。

松浦 暁子

千葉大学大学院医学研究院精神医学
千葉大学社会精神保健教育研究センター

研究課題、タイトル

Effects of sulforaphane in the maternal immune activation model of schizophrenia

コメント

この度、韓国のソウルにおいて平成28年7月3日から5日まで開催された30th CINP World Congress of Neuropsychopharmacologyに参加して参りました。

ソウル到着時には、熱帯地方を感じさせるような、傘が役に立たないような大雨に見舞われ、参加された多くの方々の印象に残るような天候でしたが、その後の会期中は気持ちのよい天気が続き快適に過ごすことができました。また会場となったCOEXセンターは、平成27年に地下鉄が延伸したことで、空港からも、近隣からも非常に利便性の高い場所となっていました。

CINPへの参加は初めての経験でしたが、全世界からその分野の代表者が参加され、高名な先生の発表を直接聞く機会が得られたこと、今後を切り拓いていくと思われる、未来を感じさせられる世界中の若手研究者の勢いのある発表を聞くことができたことに大きな刺激を受けました。

最後に、日本神経精神薬理学会よりJSNP Excellent Presentation Awardを授与いただきまして、ご指導頂いた先生方並びに学会関係者様にはこの場を借りて心より御礼申し上げます。これからより一層、日々研究活動に精進し、世界に向けて神経精神薬理研究における成果を発信したいと思います。

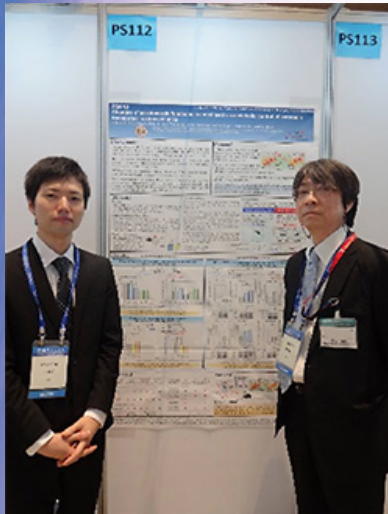


福森 良

長崎国際大学薬学部薬理学研究室

研究課題、タイトル

CB1 receptor play an important role in cognitive deficits after withdrawal from chronic administration of methamphetamine in mice



伊藤 貴博

名城大学薬学部病態解析学 I

研究課題、タイトル

Changes of serotonergic functions are mediated via metabolic control of serotonin transporter in stressed mice

コメント

第30回国際神経精神薬理学会（30th CINP World Congress of Neuropsychopharmacology）が、2016年7月3日（日）から5日（火）の3日間にわたり、韓国ソウル特別市の国際会議場（COEX）にて「FUTURE OF NEUROPSYCHOPHARMACOLOGY - Innovation Integrated with Neuroscience for Mental Health -」をテーマに開催されました。今回JSNP Excellent Presentation Award for CINPを受賞いたしました。ご指導賜りました先生方並びに学会関係者様には、この場を借りて心より御礼申し上げます。

本学会参加は、私にとって初めての国際学会であり、海外渡航でもありました。多くの不安と緊張と共に、未知の世界に触れることへの期待に胸を膨らませて、本学会に臨みました。会場のCOEXは、ショッピングセンターや映画館などと連結した巨大複合施設となっており、その中にある大小様々な展示会場では、活発な議論が繰り広げられていました。私は、ストレス負荷マウスの情動障害におけるPKCを介したセロトントランスポーターの代謝制御機構が新たな抗うつ薬のターゲットとなる検討をポスター発表しました。多数の研究者とディスカッションすることができ、多くの有益な助言も頂くことができました。

本大会には、基礎研究や臨床研究だけでなく、それぞれを橋渡すトランスレーショナルリサーチなど興味深い成果報告が数多くありました。図や映像を用いた簡潔かつ論理的な研究成果は、語学力不足の私でも興味深く拝聴することができました。日本では臨床経験の浅いベンラファキシンなどの抗うつ薬の効果や副作用に関する報告が数多くあり、日本と海外とのドラッグラグを実感しました。また、世界各国から寄せられた最新の知見や課題に触れることができ、非常に多くの刺激を受けることができました。同世代の研究者との交流や情報交換することもでき、大変有意義な学会でした。今回の受賞を励みとして、精神疾患における病態解明や治療薬の機序解明およびそれらに関する新規標的分子の探索・同定を目指し、日々精進し、社会へ還元できる成果を発信していきたいと思っております。

会期中の韓国は、梅雨の時期であり毎日が雨模様にも関わらず、東大門や明洞などは活気に溢れていました。聳え立つ建物、ファッションやグルメなど、多くの韓国文化にも触れることができました。語学力にも磨きを掛けて、再び国際学会での発表にチャレンジしたいと思います。

菅原 裕子

熊本大学医学部付属病院神経精神科

研究課題、タイトル

Identifying common and distinctive epigenetic alterations between bipolar disorder and schizophrenia

コメント

広島大学の山脇成人教授を大会長として、2016/7/3-7/5に韓国で開催された第30回国際神経精神薬理学会（CINP2016）に参加させていただきました。第46回日本精神神経薬理学会との連続開催であることから、多くの日本人研究者が参加されていました。

今回のCINPではポスター発表以外に「Women in Neuropsychopharmacology」というシンポジウムで発表する機会を頂きました。予想以上に参加者が多くとまどいましたが、女性研究者のキャリア育成について活発な議論が繰り広げられました。私は「Developing a work-life balance to enhance wellbeing」という演題で、前所属先である東京女子医科大学のサポートシステムを利用しながら自身が構築してきたwork-life balanceについて発表させていただきました。どの国においても就労者に対する育児支援は不足しているようで、院内保育や病児保育が完備されている東京女子医大の育児支援は画期的なのだと再認識しました。CINPメンバーの女性の割合は現在10%だそうで、将来的に50%を目指したいとのことでした。

最後に、この度JSNP Excellent Presentation Award for CINP 2016を受賞させて頂き、大変光栄に思っております。ご指導ご鞭撻を賜りました関係者の方々にこの場をお借りして深く御礼申し上げます。今回の受賞を励みに、今後とも精進していきたいと思っております。



村野 友幸

藤田保健衛生大学生理学研究所

研究課題、タイトル

Transcriptomic immaturity of hippocampus and prefrontal cortex in patients with alcoholism



JSNP Excellent Presentation Award for CINP 2016受賞者集合写真

池亀 天平

東京大学大学院医学系研究科精神医学

研究課題、タイトル

Hypermethylation of SLC6A4 promoter in psychiatric disorders and its effect on gene expression

コメント

2016年7月3日から5日にかけて韓国・ソウルで開催された30th CINP World congress of Neuropsychopharmacology (CINP2016)に参加させて頂き、誠に光栄なことにJSNP Excellent Presentation Award for CINP 2016を受賞させて頂きました。

今回、初めてCINPに参加いたしました。会場は近年急速に開発が進んできた江南（カンナム）地区にある複合施設COEXで開催されましたが、施設内には水族館や劇場、映画館などのレジャー施設もありその規模に先ずは圧倒されました。

学会発表はCINPの本道である薬理学関連の発表が多くを占め活発な議論が繰り広げられておりましたが、私の研究分野であるepigenetics関連でもnon-coding RNAのセッションが設けられており、精神薬理学におけるepigenetics研究への関心の高さを実感いたしました。Poster発表の際にはCommittee memberの一人であるProf. Siegfried Kasperよりコメントを頂き、また2年後ご自身の地元Viennaで開催されるCINP 2018にもお誘い頂き研究への熱意を再度刺激されました。

今回はこのような発表の機会とAwardを頂いたことを御礼申し上げます。また今後も精神神経薬理学研究に貢献できるよう精進したいと思います。

。



東京にも上陸したSolbing. このボリュームで、一つ約1200円でした。

渡邊 理紗

慶應義塾大学大学院基礎理工学専攻生物化学研究室

研究課題、タイトル

Epigenetic status of LINE-1 promoters in neurons and non-neurons

コメント

この度、JSNP Excellent Presentation Award for CINP 2016を受賞したことを大変光栄に思います。ご指導いただいた研究室の先生方、先輩方、そして学会関係者の方々にこの場をお借りして深く御礼申し上げます。今回の韓国でのCINPは、修士課程在籍中の私にとって、初めて参加する海外開催の学会でした。興味を持っていただいた海外の研究者と、自分の研究内容について英語でディスカッションすることが非常に新鮮であり、モチベーション向上に繋がりました。

CINPは私が想像していたよりも巨大な学会であり、現場の医師や薬剤師、製薬企業の社員など、普段お話を伺う事のできない方々による発表を聞くことができました。基礎研究で得られた知見が臨床現場で安全に使用されるまでに、どのような試行錯誤を経ているのかといった「縦」の繋がりを知ることができたのは興味深かったです。「臨床研究」「基礎研究」と、普段は交わることの少ない両研究分野ですが、実は実験手法や考え方などの交流が多く成されていると気づくことができました。

学会会場がソウルの中心部にあったことから、学会終了後、ソウル市内へ移動し、研究室の先輩方と話題のカキ氷を食べに行きました。量が多く、食べ終える頃には体中が冷え切っていましたが、美味しかったです。

CINPにおける経験を励みに、今後も神経精神薬理学の発展に貢献できるよう、研究に専念して参りたいと思います。このたびは誠にありがとうございました。



小川 眞太郎

国立研究開発法人
国立精神・神経医療研究センター
神経研究所疾病研究第三部

研究課題、タイトル

Reduced cerebrospinal fluid ethanolamine concentration in major depressive disorder



コメント

2016年7月3 - 5日、韓国ソウルで開催された 30th CINP World Congress of Neuropsychopharmacology (CINP2016) に参加しました。初めての韓国。江南エリアの中でも、開催会場となったCOEXの周辺は瀟洒なビジネス街といった趣でした。COEXのホームページを眺めてみると、「Coexは、江南MICE観光特区である貿易センターを、アジアにおけるMICEビジネスの中心地として育成」(<http://www.coex.co.kr/>) とあり、この「MICE」はきっとマウスの複数形ではないのだろうと思っていたところ、実際は Meeting・Incentive・Convention・Exhibition の頭文字だそう。会議誘致を核として、交通や観光を一体とした、韓国政府による国を挙げての産業政策らしいです。確かに、韓国では空港から江南エリアへのアクセスも良く、ホテルの選択肢も多く、会議場となったCOEXはとても広大で、会議後に夕食を食べに行くレストランや観光名所も多く、快適でした。ソウルのみならず韓国全土でMICEを中心とした取り組みが行なわれているようで、国の政策として会議誘致を経済活性化のために活用しているらしいです。こういった取り組みはとてもユニークではないでしょうか。韓国での国際会議の開催数は高い伸び率を示しています。日本でも、日本の観光資源や食文化的な特色なども織り交ぜて、国際会議や学术交流を中心とした総合的な産業政策を打ち出せたら、海外の多くの研究者にとってさらに魅力的な目的地となるに違いありません。

今回のCINPは、私が初めて参加する海外での国際学会です。韓国での開催ということからアジア圏の研究者の参加も多かったですし、また、日本神経精神薬理学会からの連続開催ということで日本人も多かったのですが、やはり国際学会。英語でのコミュニケーションはもちろん前提であり、ポスターセッションでも海外のネイティブスピーカーがナチュラルに猛スピードで話しかけてきてろくに対応ができず、敗北感とともに英語力が足りないことを痛感しました。しかし、別の人とは意志がとてうまく疎通できたと思えた瞬間もあり、感覚としては3勝3敗4分けくらいでしょうか。ただ、こういった場に身を置くことで初めて自分の立っている位置がわかるので、むしろ今後は積極的に海外の学会に参加していかないとはいけませんね。

私の研究テーマであるうつ病については、病態機序がいまだ不明であり、従来の抗うつ薬の奏功割合も決して高いとは言えず、ケタミンという従来のモノアミン仮説以外の作用機序に基づく新たな薬剤は登場したものの、さらなる抗うつ剤の開発が求められています。私が一番聞きたかったのは、CINP2日目の“Evidence for novel classes of anti-depression agents beyond ketamine”と題されたシンポジウムでした。台湾のProf. Hsien-Yuan Laneによるグリシントランスポーター 1 (GlyT1) を標的とした新規抗うつ剤の開発についての話が特に興味深かったです。ジペプチドである

サルコシンをマウスに投与するとGlyT1の抑制を介して抗うつ様作用を示すという話が出てきました。サルコシンは近年開発されている第二世代GlyT1阻害剤よりも作用は強くないものの、食事からも摂取可能なアミノ酸（ペプチド）が単独で抗うつ作用を示すというような事例は実際のところあまり報告がなく、面白いです。脳の中でアミノ酸関連分子は非常に多彩で重要な役割を担っています。私もアミノ酸を中心としてのうつ病のマーカ―や病態機序、新たな治療法を探る研究を進めていますが、改めて感じたのは、アミノ酸を中心とした研究はポテンシャルが大きいということでした。今回、日本神経精神薬理学会より、栄えある JSNP Excellent Presentation Award for CINP 2016 も頂きました。この賞を励みにして、いっそうがんばっていきたいと思います。うつ病の病態機序の解明につながる研究、新規創薬につながる研究、バイオマ―カーを確立する研究をめざして。

野村 洋

北海道大学 大学院薬学研究院 薬理学研究室

研究課題、タイトル

Neuronal encoding of anxiety in the bed nucleus of the stria terminalis

コメント

2016年7月3日から5日にかけてソウルで開催されましたCINP2016に参加いたしました。神経精神薬理の様々なトピックについて、基礎から臨床まで学ぶことが多い学会でした。特に私は基礎の研究者であり、病態の臨床研究や新たな治療法に関する研究に触れる機会が少ないため、とても勉強になりました。動物実験の結果と臨床での研究が独立しているのではなく、融合してディスカッションされている様子がとても印象的でした。また、最近ソウル国立大学で独立したSung-Yon Kim博士のトークを聞き、さらに今後の神経精神薬理分野について深く議論できたことがとても有意義でした。

最後になりますが、今回、日本神経精神薬理学会よりJSNP Excellent Presentation Award for CINP 2016をいただきまして大変光栄に存じます。ご指導いただきました先生方に深く御礼申し上げます。特に、これまで学会発表の場で多くの先生方と議論させていただいたおかげで、研究の方向性が定まってきたと感じております。今後も精神疾患の病態解明を目指して、研究に精進してまいります。

相澤 風花

神戸学院大学大学院 薬学研究科 臨床薬学研究室

研究課題、タイトル

The changes of emotional behavior in a free fatty acid receptor 1, GPR40/FFAR1, deficient mice

コメント

2016年7月3日 - 5日まで韓国・ソウル市の COEX にて開催されました 30th CINP World Congress of Neuropsychopharmacology; CINP2016 にて参加・発表致しました。その際、私の発表に対しまして、JSNP Excellent Presentation Award for CINP2016を授与いただきましたことを誠に光栄に存じます。日々の研究成果をこのような形で評価していただけたこと大変嬉しく感じております。本賞受賞にあたり御指導とご鞭撻を賜りました先生方および学会関係者の皆様、また温かく見守り続けてくださる家族にこの場を借りて厚く御礼申し上げます。

今回の CINP2016 は、第 46 回日本神経精神薬理学会年会 (JSNP2016) との合同開催であったことと、日本から近いとの理由で、国際学会初心者な私は大きな不安に苛まれつつも、小さな期待を持って参加することといたしました。韓国へ到着した当日はあいにくの雨模様でした。慣れない地下鉄に戸惑いつつも、無事に会場の最寄駅まで到着いたしました。たどりついた会場の COEX 付近は多くのビルに囲まれたオフィス街のような街並みである一方、一歩路地裏に入るとリーズナブルな焼肉店が立ち並ぶ少し不思議な空間でした。

CINP のポスター発表当日は、神経精神機能に対する脂質をターゲットとしたアプローチということで、海外の先生方がポスターを見て足を止め、私の拙い英語での発表に対し、とてもフレンドリーにご質問くださいました。また、研究フィールドを同じくする先生方からは実験の方法やデータに関するディスカッションなど、親身なご意見も多く頂戴することができました。自身の英語力の無さを痛感した発表ではありましたが、今後の実験を行っていく上でのご意見やアドバイスを多くいただくことができ、大変充実した発表であったと感じています。

CINP では自閉症・うつ病などの精神疾患に関して基礎から臨床まで多くのポスターやシンポジウムが開催されておりました。特に、普段あまり見慣れない臨床研究に関しては、遺伝子多型による疾患イベントの解析や薬剤耐性などテラーメイドな研究が多くなされており興味深く拝見しました。またポスター賞を授与された先生のポスターで質問することもでき、より新しい独創的な研究を垣間見ることができました。特に、インパクトに残っているのは、Lilly Neuroscience Basic Research Award を受賞された Noboru Hiroi 先生の染色体 22q11のコピー数多形と神経精神疾患に関するご発表です。マウスの幼少期における鳴き声のパターンと自閉症の関係、その遺伝子レベルでの解析は大変興味深く、先生もアグレッシブにご発表しており、じっとスライドを見つめていました。

私の研究は、疼痛の情動的側面における増加メカニズムを主としておりますが、本学会では疼痛に関するセッションは少なく、新たな知見とは出会

うことができませんでした。その点は非常に残念ではありましたが、自身がそのフィールドを開拓できると考えると多くの可能性を秘めている領域であると実感いたしました。

初めての国際学会として、CINP 2016 で学んだこと、反省点は多くありますが、これをモチベーションとして、神経精神薬理の発展に貢献できるよう、研究に精進し、また国際医学会への参加を継続していく所存です。

末筆ながら、このような機会を与えていただきました JSNP2016 年会長の池田和隆先生をはじめ関係者の皆様へ厚く御礼申し上げます。おり、じつとスライドを見つめていました。

私の研究は、疼痛の情動的側面における増加メカニズムを主としておりますが、本学会では疼痛に関するセッションは少なく、新たな知見とは出会うことができませんでした。その点は非常に残念ではありましたが、自身がそのフィールドを開拓できると考えると多くの可能性を秘めている領域であると実感いたしました。

初めての国際学会として、CINP 2016 で学んだこと、反省点は多くありますが、これをモチベーションとして、神経精神薬理の発展に貢献できるよう、研究に精進し、また国際医学会への参加を継続していく所存です。

末筆ながら、このような機会を与えていただきました JSNP2016 年会長の池田和隆先生をはじめ関係者の皆様へ厚く御礼申し上げます。



中本 賀寿夫

神戸学院大学薬学部

研究課題、タイトル

The dysfunction of brain free fatty acid receptor GPR40/FFAR1 signaling relate to the development of chronic pain



坂口 哲也

東京大学大学院薬学系研究科薬品作用学教室博士課程

研究課題、タイトル

Empathic deficits in a mouse model of autism spectrum disorder

コメント

去る2016年7月3日から5日までの3日間、私は韓国ソウルにて開催された第30回国際神経精神薬理学会（CINP 2016）に参加してまいりましたので、その様子についてご報告致します。

羽田空港からソウルの金浦空港までのフライト時間は僅か約2時間30分で、機内食のカレーを食べつつ学会の要旨集を眺めていたらあっという間に到着してしまいました。ソウルに降り立ってみると、街並みや建物の外観は東京と似ている一方で、道を行き交う人たちの服装や店先の看板の雰囲気などがどことなく違っていて不思議な感覚がしました。飲食店に入ってみると、テーブルにはキムチの入った壺が置かれていたので、本場の辛さに警戒しながら恐る恐る口にしてみたのですが、意外と辛過ぎず少し甘みもあってとても美味しかったです。学会期間中は雨に見舞われることもありましたが、会場となったCOEXのコンベンションセンターは地下鉄の駅から直結していた上、運良く企業ブースで丈夫な折り畳み傘を頂けたので不都合なく参加することができました。

CINPでは、基礎から臨究に及ぶ非常に幅広い分野の研究者が世界から一堂に会し、神経精神薬理に関して多様な視点から議論が行われます。私は普段、大学の研究室でマウスを対象にした基礎研究に勤しんでいるのですが、研究成果を実際の臨床現場に応用する上での課題や薬物治療の現状、今後の創薬の展望について見識を深めたいという思いから本学会に参加致しました。特に、うつ病や不安障害、統合失調症といった各種疾患について教科書レベルの知識しか有していなかった私にとって、治療薬選択のプロセスや難治性の患者さんで頻発する症状など、臨床に関する情報は新鮮に感じられ、大変勉強になりました。また、そうした話題に触れる中で、神経回路レベルで生じた異常が症状として現れるまでの繋がりを解釈するための示唆を得られた点が収穫でした。そのほかにも、学会初日の川人先生によるプレナリー講演では、ニューロフィードバックシステムを用いて脳を適切な状態に近づけるという研究のお話があり、非常に興味深く拝聴させていただきました。

今回、私自身は自閉スペクトラム症モデルマウスにおける行動障害の新たな特性に関する研究成果を発表致しました。発表には、大学や製薬企業で発達障害の研究をされている方や医師の方などが聞きに来て下さり、生理学や心理学、病理学など非常に多岐にわたる視点からの質問やコメントを頂きました。特に、疾患の治療という側面を含めた多様な観点から議論ができるのは本学会の魅力であるように感じました。

最後になりましたが、私はこの度JSNP Excellent Presentation Award for CINP 2016を賜りまして大変光栄に存じております。また、CINPへの参加助成の件を含めまして、JSNPの関係者の皆さまに心より御礼申し上げます。

ます。今回の受賞経験を糧に、今後も更に研究に邁進し、神経精神薬理の進展に貢献できるよう努めてまいります。おり、じっとスライドを見つめていました。

私の研究は、疼痛の情動的側面における増加メカニズムを主としておりますが、本学会では疼痛に関するセッションは少なく、新たな知見とは出会うことができませんでした。その点は非常に残念ではありましたが、自身がそのフィールドを開拓できると考えると多くの可能性を秘めている領域であると実感いたしました。

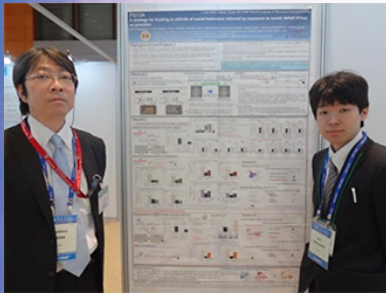
初めての国際学会として、CINP 2016 で学んだこと、反省点は多くありますが、これをモチベーションとして、神経精神薬理の発展に貢献できるよう、研究に精進し、また国際医学会への参加を継続していく所存です。

末筆ながら、このような機会を与えていただきました JSNP2016 年会長の池田和隆先生をはじめ関係者の皆様へ厚く御礼申し上げます。おり、じっとスライドを見つめていました。

私の研究は、疼痛の情動的側面における増加メカニズムを主としておりますが、本学会では疼痛に関するセッションは少なく、新たな知見とは出会うことができませんでした。その点は非常に残念ではありましたが、自身がそのフィールドを開拓できると考えると多くの可能性を秘めている領域であると実感いたしました。

初めての国際学会として、CINP 2016 で学んだこと、反省点は多くありますが、これをモチベーションとして、神経精神薬理の発展に貢献できるよう、研究に精進し、また国際医学会への参加を継続していく所存です。

末筆ながら、このような機会を与えていただきました JSNP2016 年会長の池田和隆先生をはじめ関係者の皆様へ厚く御礼申し上げます。



長谷川 章

名城大学大学院病態解析学 1

研究課題、タイトル

A strategy for treating in deficits of social behaviors induced by exposure to social defeat stress as juveniles

コメント

2016年7月3日～5日に30th CINP World Congress of Neuropsychopharmacology; CINP 2016が大韓民国（韓国）のソウル特別市にて開催され、参加しましたので報告いたします。

本年のCINP 2016が韓国ソウル市で開催されることに伴い、7月2日、3日に開催されました第46回日本神経精神薬理学会：JSNP 2016からの参加のため7月1日に韓国に入国しました。入国当日から学会最終日の7月5日まであいにくの雨であり、時には豪雨でありました。悪天候の一方で、JSNP 2016およびCINP 2016に世界各国から神経精神に関わる基礎および臨床の研究者が集いました。国際大会に初参加の私にとってCINP 2016は、精神神経疾患に関する臨床研究の発表がJSNP 2016より非常に多かったこと、基礎研究で得られた発見を診断や治療に結びつけるトランスレーショナル・リサーチ、新規診断法および新薬の臨床現場における問題点や疑問点を基礎研究にフィードバックするリバーストランスレーショナル・リサーチに関する発表が多数あり、大変有意義な時間でありました。特に、気分障害におけるグルタミン酸作動性神経系の関与について興味深く研究成果を拝聴しました。Symposia 1では、テキサス大学健康科学センターのFrazer先生が、ケタミンのうつに対する作用機序を薬理的、遺伝学的、および光遺伝学的に検討して得られた結果を基に、ケタミンの代替となる薬物の探索および評価を行った基礎研究の成果を報告されました。Symposia 14では、ケタミンに基づく新規抗うつ薬について4講演ありました。中国医薬大学のLane先生はNMDA受容体の活性に必要なグリシンに着目し、グリシントランスポーターを抑制する化合物の抗うつ作用としての妥当性を検討した基礎および臨床研究の成果の報告、北京大学のLu先生はNMDA受容体サブユニットのリン酸化が慢性ストレスに関与し、治療戦略になり得ること、神経の炎症を誘導するタンパク質を抑制することで抗うつ作用を示す基礎研究の成果を紹介し、免疫系に焦点を当てた新規抗うつ薬の可能性について発表されました。ヤンセンファーマのFurey先生は抗コリン薬であるスコポラミンの抗うつ作用について、評価尺度やfMRIを用いた有効性および薬物応答性を評価するバイオマーカーの探索について報告し、大正製薬の茶木先生は代謝型グルタミン酸受容体であるmGlu2/3受容体拮抗薬がケタミンと同様の機序で抗うつ作用を示し、mGlu2/3受容体拮抗薬がケタミンの代替薬となる可能性やケタミンの代替として、NMDA受容体グリシン部位部分作動薬であるGLYX-13やNMDA受容体サブユニット拮抗薬に関する報告を行いました。その他、うつ、統合失調症、不安障害、および双極性障害などの精神疾患の基礎・臨床研究の成果が報告され、どの会場でも活発な議論が行われていました。

私はポスターセッションで発表しました。ランチタイムでの発表ということもあり、サンドイッチを片手に質疑が行われ、ポスターセッションのブースは大変活気にもあふれていました。そのため、緊張感も和らぎ、つたない英語での説明にも耳を傾け一生懸命聞いて頂けて大変うれしく思いました。貴重な意見もいただくことができ、今後の研究活動に活かしていければと思いました。本学会の参加を通じて、国際的な視野を広げ、語学力を含め努力して行く必要があると感じました。

最後に、光栄にも、本大会においてJSNP Excellent Presentation Award for CINPおよびCINP 30th Congress Student Encouragement Awardを受賞することができました。JSNPおよびCINP関係者の皆様に厚く御礼申し上げますと共に、このような機会を与えてくださいました先生方、発表にあたりご指導賜りました先生方に感謝申し上げます。本受賞を受けまして、より一層研究活動に精進していきたいと思っております。



JSNP Excellent Presentation Award for CINP 2016を受賞された皆さん



ポスター会場



会場から外の風景



Welcome Reception and Awards Ceremony

森屋 由紀

(公財) 東京都医学総合研究所・依存性薬物プロジェクト

研究課題、タイトル

Methamphetamine induced changes of monoamine neurotransmission in 5-HT1B KO mice

コメント

2016年7月2日～3日に第46回日本神経精神薬理学会、2016年7月3日～5日に30th CINPが韓国ソウル市のCOEXで開催され、参加しました。今回、ポスター発表におきましてJSNP Excellent Presentation Award for CINP 2016を受賞できたことを心より感謝申し上げます(写真1)。今回受賞した研究内容は、大学院から継続している研究成果ですがこのような賞につながり大変嬉しく感じております。ご指導を受け賜りました皆様、学会関係者の方々にこの場をお借りして深く御礼申し上げます。今後も受賞したことを励みに、より良い研究成果をだせるように日々精進していきたいと思っております。

学会会場のCOEXはソウル市江南区にあり高級住宅街も近く、静かで落ち着いた雰囲気のある場所でした(写真2)。CINPは神経精神疾患の臨床から基礎研究を行っている先生方が世界中から参加しているため、最新の薬物治療、モデルマウスにおける評価、分子基盤の解明、治験における評価システム、新薬開発の現状と課題など、幅広い内容の発表があり、最新の研究に関する知識を得ることができました。今、世界でどのような研究領域が注目されているのかを知ることもできました。特に、韓国で行われた学会ということもあり、韓国の中学生を対象とした自己コントロールと飲酒、喫煙、インターネット、スマートフォンの依存との関連性について疫学調査をした発表において、自己コントロールの意識の低さは、周りの環境や教育環境の違いが大きく影響しているという研究結果に興味を持ち、研究視野が広がりました。

今回の国際学会にはJSNPにも参加された日本人の先生方も多く、初日のJapan Nightには総勢約300名の神経精神薬理の研究者が一堂に会して懇親を深める機会があり、とても有意義な時間を過ごさせて頂きました。自身の研究分野以外の発表に触れる機会が多く、貴重な経験をさせて頂いたことに心から感謝いたします。



萩原 英雄

藤田保健衛生大学総合医科学研究所システム医科学研究部門

研究課題、タイトル

Transcriptomic evidence for dematuration of the mouse frontal cortex and hippocampus by chronic antidepressant treatment



成田 心

麻布大学大学院環境保健学研究科環境保健科学専攻

研究課題、タイトル

Association between autism susceptibility candidate 2 haplotypes and alcohol dependence in a Japanese population

コメント

2016年7月3日から5日まで韓国ソウルCOEXで開催されました第30回国際神経精神薬理学会 (30th CINP World Congress of Neuropsychopharmacology; CINP2016) に参加いたしました。

私にとって人生初めての海外渡航、国際学会への参加であったため、学会当日までは不安と楽しみが半々といったような日々を過ごしていました。今回、CINPとの連続開催であった第46回日本神経精神薬理学会年会にも参加したため、1日から韓国入りしました。金浦国際空港での入国手続きから学会会場近くの宿舎までの移動は初めて尽くしのことばかりでしたが、大きなトラブルもなく無事に1日目を終えることができました。2日目はJSNPのポスター発表があり、その後のJapan Nightに参加させていただきました。Japan Nightには大変多くの先生方が参加されており、また、他大学の大学院生の方ともお話をさせていただき、大変貴重な楽しい時間を過ごすことができました。

3日目からはCINP2016が開催され、神経精神薬理学の基礎から最新のトピックまで幅広くプログラムが展開されており、私自身も数多くのセッションを拝聴しました。特に、“Recent advances in drug dependence genetics - legal and illegal”と題したシンポジウムでは、Addictive disorderのあらゆる側面に関わる遺伝子やその多型についての現在の見解や今後の展望が多角的に網羅されていて、同領域に関連した研究を行っている私にとって大変興味深いものであり、今後の研究活動の糧となる有意義な時間となりました。依存性薬物に関する遺伝子解析研究には今後も議論の余地があるかと思いますが、人種差や性差、疾患の表現型など様々なファクターを考慮し検討することで、疾患関連遺伝子の新たな役割がより詳細に解明される可能性があるかと再確認しました。

CINP2016でのポスター発表では、様々な分野の研究をされている先生方とディスカッションしましたが、何より私の英語力が未熟で、相手の先生に内容を理解してもらうことに苦戦してしまいました。しかし、自分の言いたいことが伝わった時は大変嬉しく、まだまだ勉強が必要な私ですが、少し自信が持てた瞬間でもありました。また、今回CINPよりStudent Encouragement Awardを授与いただき、大変貴重な経験を得ることができました。

今回の学会では多くのことを学びましたが、最初は初めての国際学会で不安だった気持ちも徐々に楽しさに変わり、基礎から臨床まで幅広い分野の研究が集結した本学会に多くの刺激を受けました。また、自分が経験したことのないことにも勇気をもって積極的に取り組むことで得られることもたくさんあるということ、他国の先生方とのコミュニケーションを通じて実感し、ディスカッションの重要性を改めて感じました。

最後に、今回のポスター発表演題におきまして、日本神経精神薬理学会よりJSNP Excellent Presentation Award for CINP2016を授与いただきましたことを誠に光栄に思います。常日頃よりご指導くださっている先生方、研究室の皆様、学会関係者の皆様に深く御礼を申し上げます。今回の受賞を励みとし、身を引き締め、微力ながらも日々精進していく所存です。今後ともご指導ご鞭撻の程、よろしくお願いいたします。



中尾 章人

藤田保健衛生大学総合医科学研究所システム医科学研究部門

研究課題、タイトル

Three-dimensional analysis of morphological changes in dendritic spines and mitochondria in dentate gyrus granule cells in Schnurri-2 knockout mice, an animal model for schizophrenia

泉 久尚

東北大学大学院薬学研究科薬理学分野

研究課題、タイトル

Alzheimer disease therapeutics candidate, SAK3 improves the cognitive functions through inhibition of amyloid beta accumulation in APP23 mice

コメント

2016年5月3日から5日にかけてソウルで開催されました第30回国際神経精神薬理学会 CINP World Congress of Neuropsychopharmacology に参加致しました。この度、JSNP Excellent Presentation Award for CINP 2016 を受賞致しましたことを大変光栄に存じます。この場を借りて御礼申し上げます。

今回ソウルで開催された CINP ですが、私が到着した初日は警報が発令されるほどの大雨で大変な目にあいました。ですが、2日目からは上着を着ていると暑いほどの晴天に恵まれ非常に気持ちよく過ごすことが出来ました。学会終わりにソウルの街を観光しましたが、さすが首都ということもあり非常に発展しており、またビビンバや焼き肉などの料理も美味しく存分に楽しむことが出来ました。

私は国際神経精神薬理学会に参加するのは今回が初めてでしたが、基礎研究から臨床研究まで幅広いトピックについて拝聴させて頂き、普段基礎研究をメインとしている私にとってはとても学ぶことが多かった学会であったと同時に、基礎から臨床への研究成果の還元的重要性について再認識することが出来た学会でありました。また、私の英語力の低さを痛感した学会でもあり、今後の英語スキルの向上とこのような国際学会への参加の重要性を改めて実感することが出来ました。今回、このような賞を頂けたことは私にとって大きな励みになりました。この経験を糧に今後益々研究に邁進していきたいと考えています。

石渡 小百合

東京医科歯科大学精神行動医科学分野

研究課題、タイトル

Evaluation of plasma and cerebrospinal fluid G72 protein levels and their correlations with psychiatric symptoms in schizophrenia and major depression

コメント

2016年7月3日から5日にかけて韓国・ソウルで開催された30th CINP World congress of Neuropsychopharmacology (CINP 2016)に参加致しました。

CINPへの参加は、ストックホルム、バンクーバー大会に続き3回目となります。アジアでの開催、そして日本神経精神薬理学会年会との連続開催ということもあり、これまでのCINPよりもアジア人が多いという印象を受けました。

はじめて訪れた韓国・ソウルは、予想以上にビルと坂が多い街でした。特に、会場周辺にはオフィスビルも立ち並び、平日は、韓国の会社員の方達に混じりながら学会会場へ向かうこともありました。初日は電車の乗り方もまいちよく分からず右往左往していましたが、一緒に行った先生方や、現地の方々に色々教わり、どうにか3日間乗り切ることができました。

今回の学会参加で私が楽しみにしていたことの一つは、我々が注目している“G72タンパク質 (D-アミノ酸酸化酵素の活性化因子)”の研究をしている海外グループの先生とお話する事でした。今回私がポスターで発表させていただいた内容は、そのグループの先生達と異なる結果だった為、何と言われるか内心ハラハラしながら御挨拶したのですが、丁寧に話を聞いて下さり、お互いの実験方法や、サンプル条件の違い、薬物の影響など様々なことをディスカッションすることができ、とても有意義な時間を過ごす事ができました。

国際学会の利点の一つは、世界中の様々な研究者が、それぞれ、また、時には協力しあいながら、疾患の機序解明を目指し、臨床・基礎研究をしている、ということを実感できることだと思います。日々、目の前の研究に取り組んでいるとついつい忘れがちな、世界の流れや色々な人々の考え方を知る度に、やりがいや自分の未熟さを感じ、モチベーションアップにつながっています。また、CINPにはどこかアットホームな雰囲気があり、私のような若輩者でもポスター会場などで、著明な先生方に御挨拶や質問ができることが毎回楽しみです。

今回、日本神経精神薬理学会より JSNP Excellent Presentation Award for CINP 2016を授与されましたことを大変光栄に思います。日々、ご指導ご鞭撻を頂いた皆様、そして学会関係者の皆様にこの場をお借りして、深く御礼申し上げます。今後も、今回の経験を糧に、神経精神薬理の更なる発展に貢献できるよう日々精進して参りたいと思います。今後ともどうぞよろしくお願い致します。



久保 有美子

東北大学大学院医学系研究科災害精神医学分野

研究課題、タイトル

Association between μ -opioid receptor gene variant 118 A>G and personality traits among Japanese population



牧之段 学

奈良県立医科大学精神医学講座

研究課題、タイトル

Social experience changes remyelination through interleukin-6 in mice

コメント

このたび、第46回日本神経精神薬理学会年会・第30回国際神経精神薬理学会ソウル大会に参加させて頂きました。精神薬理系の学会に参加させて頂くのは初めてであり、大変勉強になりました。

CINPの開会式では広島大学精神科の山脇成人教授がご挨拶され、クロルプロマジンやハロペリドールなどの抗精神病薬としての発見から最新の知見まで、これまでのCINPに関連する活動や業績についてご紹介頂きました。私は精神疾患の基礎研究を中心に行って参りましたが、実際に患者さんの役に立つ創薬ということにあまり関心を払っていませんでした。通常の臨床業務において、クロルプロマジンやハロペリドールなどはふつうに処方させて頂いておりますが、JSNPやCINP所属の先生方が協働して創薬のシステムを作り、治療薬として実用化されるまでに至ったストーリーを知るにつけ、“精神薬理”という言葉がやたらと魅力的に感じられるようになりました。現在、自閉スペクトラム症の基礎研究・臨床研究を進めさせて頂いておりますが、もう少し薬理的な観点からも切り込めるような研究者になれたらとおもいます。

ソウルには米国留学時代の親友がおりまして、ソウルに行くたびに遊んでもらっているのですが、今回も奈良医大精神科のメンバーとともに、プッチャンドンの夜を堪能させて頂き、薬理的な研究を進めるべくリフレッシュさせて頂きました。